



「多様性豊かな多文化共生社会」にむけて 20 年 ～NPO 法人愛伝舎の歩みとこれから～

NPO 法人愛伝舎 理事長 坂本 久海子

愛伝舎が生まれるまで

NPO 法人愛伝舎は、「多様性豊かな多文化共生社会」の実現を目指して、2005 年 8 月に設立されました。2025 年で 20 周年を迎える、歩みを振り返りながら、これからの可能性について考えてみたいと思います。

きっかけは、1990 年代に私が約 4 年半ブラジルに滞在した経験にあります。サッカーワールドカップの開幕日には学校や銀行が休みになるなど、日本とは異なる文化の中で暮らすことで、価値観の違いやカルチャーギャップを体感しました。この経験を通じて、異なる背景を持つ人々が異国で生活する難しさを実感しました。

帰国後、三重県鈴鹿市の小学校で非常勤講師として働く中で、外国にルーツを持つ子どもたちや保護者が直面する課題を目の当たりにしました。雇用の不安定さ、情報不足、日本社会の受け入れ体制の不備など、日本で暮らす困難さを感じました。

そんな中、三重県主催の「外国人コミュニティを支援するソーシャルビジネス講座」への参加を機に、愛伝舎を設立。当初は困りごとの解決を目指す支援活動でしたが、次第にこれは「支援」ではなく、社会の基盤づくりであるという意識に変わっていきました。



日系人介護人材育成研修を 8 回開催



鈴鹿市営住宅外国人入居者にワクチン接種の案内チラシ配布

支援から共創へ ～多文化社会の担い手づくり～

活動は、三重県の「民との協働」事業から始まり、電話通訳や生活ガイダンス、日本語教育、就労・居住・健康に関する相談支援など、多岐にわたる支援を展開してきました。リーマンショックの際には、製造業以外の働き方を模索し、介護人材育成研修を実施。125 人がヘルパー 2 級を取得し、今も介護の現場で活躍しています。

新型コロナウイルス感染症拡大時には、感染予防やワクチン接種の情報を迅速に発信し、鈴鹿市営住宅 8 団地に暮らす南米系住民を全戸訪問しました。情報の届きにくい人々に直接声を届けることの大切さを改めて痛感しました。現在三重県の 2 儿童相談所に、通訳者を派遣し、外国人家庭支援、療育判定通訳にも取り組み、小児科医と外国人の子どもの発達の支援体制構築にも取り組んでいます。

2019 年からは県立高校 3 校でのキャリア教育、2022 年からは三井物産(株)の「キャリア支援プログラム」を受託し、ブラジル人学校を対象にセミナーを実施。少

子化と労働力不足が進む中、外国ルーツの若者が社会の担い手となるよう、教育とキャリア形成の支援を行っています。2024年に始まった三井物産(株)「在日ブラジル人大学生奨学金事業」では、奨学生の成長を後押ししています。



高校生にキャリア教育を実施・進学と就職の説明とロールモデルの紹介

つながる声、広がる共生 ～20年で築いた信頼とネットワーク～

2019年には、東海三県の市民団体とともに「外国人支援・多文化共生ネット」を設立し、私は代表を務めています。名古屋出入国在留管理局と連携し、現場の声を政策提言へとつなげる役割も果たしています。トヨタ財団の助成を受けて妊娠・出産・育児に関する施策の調査研究と提言も行いました。



飯野高校生徒と三重県観光地を多言語で発信

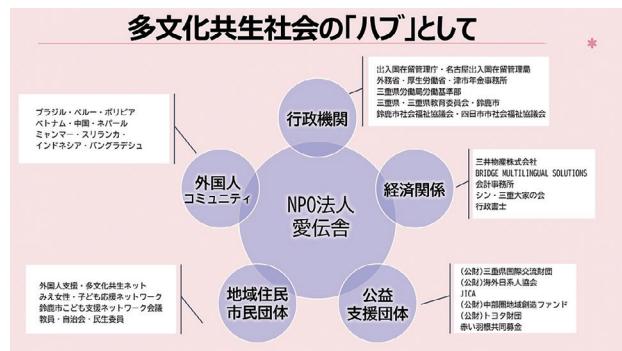


設立20周年記念シンポジウム 登壇者と共に

2025年8月には、設立20周年記念シンポジウム「第2世代と描くこれからの多文化共生社会」を開催しました。初代入管庁長官・佐々木聖子氏による基調講演では、「多様性は寛容性であり、人を大切にする和の社会につながる」という言葉に共感し、今後の社会づくりへの大きな指針を得ました。「外国ルーツの若者とともに考える、私たちの未来」をテーマにパネルディスカッションも行い、これまで支援してきた若者たちが、社会を支える存在へと育っていることを実感しました。

20年間で、行政、企業、市民団体、地域住民、外国人コミュニティーとの信頼関係とネットワークが築かれ、今では地域をつなぐ「ハブ」としての役割を意識して活動しています。

多文化共生は、誰もが自然体で暮らせる日常のあり方で「仲良く楽しいこと」が大事と考えています。これからも三重から、「多様性豊かな多文化共生社会」を地域と共に育んでいきたいと思います。



愛伝舎の連携のネットワークの図